

桐鈴凜々

第82号
平成24年3月15日発行
発行責任者
社会福祉法人 桐鈴会
理事長 黒岩 秩子
南魚沼市浦佐 5142-1
電話 025-780-4118
FAX 025-777-3731
e-mail
suzukake@rose.ocn.ne.jp
http://www17.ocn.ne.jp
/~tourei/

夢が膨らんできました

―「とんとん」と「喫茶店」と「おひさま」―

桐鈴会理事長 黒岩 秩子



桐鈴会は、鈴懸の隣の土地三六〇坪を購入し、そこに二つの障がい者施設を建てようということ、設計がほぼ終わり、今年に入ってすぐに助成金の申請があり、設計図つきで申請書を県に提出しました。

・日中活動の場

―「とんとん」と「喫茶店」―

障がい者の皆さんが日中過ごす場所「とんとん」は、二〇人定員でそのうち六人は重度の

皆さんです。ここは、すぐ隣に八色の森公園があり、そこに遊びに来る親子連れのお茶の場になるということをメインの活動にしようと考えています。そのためにパンを作り、ケーキもつくり、喫茶店と売店があります。喫茶店には畳のコーナーを作った、そこには絵本などを置き、赤ちゃんが昼寝をしたりおむつを替えたりできるようにします。二階建てで建坪が一四〇坪。建物については半分が国、四分の一が県で、上限四一六〇万

円の助成金が出ます。また、市からも八分の一の助成が付き、ところが融雪のための井戸や、道の高さにまで上げる「土盛り」や舗装などが助成の対象外です。見積つたら総額で一億一〇〇〇万円でした。差し引き六〇〇〇万円がこちらで用意する資金です。

・ケアホーム「おひさま」



夜寝るところ、つまり家に相当するケアホーム「おひさま」は定員七人で、四人が重度、三人が軽度となっており、一階は三部屋と宿直室、二階は五部屋でそのうちの一つはショートステイ用です。建坪は八〇坪、見積りが五〇〇〇万円。これも助成金の比率は同じで上限が一六〇万円。ショートステイやエレベーターの補助金がついたとしても自己資金を二〇〇〇万円は用意しなければなりません。

・それにつけても…

―資金提供のお願い―

両方一度に助成が下りる確

率は低いと言われましたが、今年には県がこの二つを両方も国の方に挙げたということです。今まで県が挙げた事業はほとんど国でも通ってきたそうで、今年には災害などで資金難だからどうなるかわからないと県は言うていますが、両方ができるつもりで県も予算を立てたそうですからこちらもそのつもりで動き始めます。まずは資金集めです。

以前皆様にお願ひした時に、融資や寄付などのご協力くださった皆様、この場を借りてお礼を申し上げます。

そんなご協力にもかかわらず、見積りによると六〇〇〇万円の借金をしなくてはなりません。福祉医療機構で借りると一・三%の利子がつきます。運営費の中から元金の他に利子まで払っていくのはとても大変です。皆様に無利子の融資をお願いできないでしょうか？寄付もいただけたら大変ありがたいことです。

桐鈴会につながる人々と、夢を追い続けたいと思ってください。方々に平身低頭お願いする次第です。

なお、二月二十五日(土)午後、地元天王町集落センターで、役員八人が参加して地元説明会を催していただきました。いろいろな質問が出て、星野淳子と二人で答えていきました。皆さんいろいろと心配してくださいましたが、最終的にはご了承いただくことができました。

喫茶店の名前を募集します。採用された方には、賞品を用意します。

○「喫茶店の名前」応募先

電話 025-780-4118
FAX 025-777-3731
Mail suzukake@rose.ocn.ne.jp
お名前、連絡先が分かるようにお願いします。

○ご融資・ご寄付をいただける方

連絡先は上記と同じです。
担当は「理事長 黒岩」、又は「施設長 林」です。よろしくお願いします。

サンクスコンサート

「禍転じて…」

夢草堂運営実行委員長

鈴木 智子



二月十九日に「岸本祐有乃さん指揮による、城内中学吹奏楽部のサンクスコンサート in 夢草堂」を企画しました。昨年の一〇月、JOYコンサートでさわらびホール満員の聴衆を魅了した皆さんです。

連日の大雪にうんざりしていたので、彼らの若く清々しい音楽と岸本祐有乃さんの笑顔にまた会えると楽しみにしていました。

ところが、「桐鈴凛々」でお知らせし、プログラムも完成したコンサート三日前「城内中学二年生はインフルエンザのため学年閉鎖、土日も外出禁止。コンサートに出演可能な部員は数名の一年生のみ」との連絡がありました。

しかし城内中学吹奏楽部顧問の関雅美先生は地元で「笹舟」という混声合唱団を長年運営していらして、急遽、「笹舟」のコンサートをやろうと手配して下さいました。急なことなので、精鋭メンバー八人で行うこととなりました。曲目決定は前日。当日午前中に岸本祐有乃さんと「笹舟」のリハーサルという急展開でした。実行委員は当日プログラムを印刷し、コンサート内容変更の張り紙をあわてて会場に掲示するという、ドタバタでした。最後にこのプログラムが楽しいプレゼントをしてください。そして本番。ありがたか

ったのは、会場にお越しいただいた皆さんが誰一人急なコンサート内容変更にも、不満を述べなかつたことです。一曲目は、「ふるさと」。アカペラで美しく力強いハーモニー、歌い終わると会場から思わず「ほーっ」と感嘆の声が上がりました。この一曲で会場は「笹舟」のコーラスに



関雅美先生に記念品をプレゼントする団員の娘、小田島藤子(とうこ)さん。(小3)

引き込まれてしまいました。その後「カタツムリ」「七つの子」等耳慣れた童謡が続き、遠藤容子さんによるソプラノ独唱「宵待草」では御年九〇歳の方が聞き惚れて思わず一緒に口ず

さむ場面もありました。きつと懐かしく大好きな曲だったのでしよう。最後に「上を向いて歩こう」を全員一緒に歌い、終了。アンコールの声があり、指揮の岸本さんが「ではもう一度《上を向いて歩こう》を《一緒に！》というところ、会場から立ち上がった。流浪の民が聞きたいよね！」の声。実はプログラムには「流浪の民」があつたのですがリハーサルでピアノ伴奏が不安というところで歌われなかつたのです。「笹舟」メンバーも顔を見合わせ苦笑しています。関雅美先生が「ピアノ間違つたらごめんなさい」とピアノの前に。メンバーもニヤニヤしながら「どうしても聞きたいですか？」と「流浪の民」が始まりました。ソプラノソロ部分で小さなミス。メンバー全員につこり笑つて「もう一回やり直し」と感動のアンコールとなりました。「浦佐認定子ども園」の園長さんは岸本さんと「笹舟」の皆さんに「是非、子ども園に来て歌つて下さい」とラブコールしていました。岸本祐有乃さん、「笹舟」の皆さん本当に素敵なコンサートあり

がとうございました。そして城内中吹奏楽部の皆さん、元氣になつたら夢草堂で演奏して下さいね。御大事に。追伸、「笹舟」メンバーは全員岸本祐有乃さんの大ファンになつたそうです。



多くの人を魅了する岸本さんの笑顔

○感想をいただきました

今回初めて「笹舟」の方々の歌声を聴きました。とても素晴らしく、聴いていて鳥肌が立ちました。そのように感じたのも、「笹舟」の方々が一生懸命歌つてくださったからではないかと思つています。今は音楽をテレビやCDなどで聞くことも多いですが、演奏家や歌い手の息遣いが伝わる、ライブの音楽会の良さを再確認することができました。本当にありがとうございます。

渡辺真一郎(黒岩海映の夫)

城内中学校吹奏楽部演奏会
(岸本祐有乃指揮)

- ★期日 3月25日(日)
- ★時間 午後2時～3時
- ★会場 夢草堂

大勢の方のお越しをお待ちしています。

○ステキなお知らせ!



恒例のもちつき

グループホーム桐の花

坂和 夕子



二月四日に毎年恒例となつているもちつきを行いました。もち米を蒸かすという大役を仰せつかった私は、前日からドキドキです。「上手に蒸かせなかつたら大変なことだよお〜」と思ひながら当日を迎えました。いろいろ事件はありました

が、なんとか無事蒸かし上がり、もちつきの始まりです。今年には職員の関の夫、石田茂晴さん家族、石田悦秋さんがボランティアとして来てくださいました。デイサービス利用者の中島さんに、男性代表でついていたいただきましたが、昔やったことがあるのでしょうか？上手についてい



息を合わせて、それっ！
「よいしょ！」「はいよ！」

らつしやいました。私もやってみましたが、へつぴり腰で駄目でした。そうそう杵を持つ機会もありませんので、貴重な体験をさせていただきました。つきあがったものは、あんど、大根おろし、雑煮で大変おいしくいただきましたが、食べながら「あーまた太つてしまう」と思つてしまった私でした。



赤澤珠さんが暮れの12月30日、19時に亡くなりました。(享年、94歳)

赤澤さんに送る

お別れの言葉

ケアハウス鈴懸入居者

鈴木 スミ

私がどうして赤澤さんを知ったのか。鈴懸にショートステイに来たときに、星キクさんを訪ね、間違って貴女の部屋へ行ったことが「逢うは別れの始まり」の縁でお付き合いが始まりましたね。

私の趣味が詩吟と妻有の十日町で始めた押し花であることを知って、貴女は私の詩吟を聞く心が引き締まると、二三日置きに私を訪ねてこられました。そのとき貴女は「私も子どもの頃は声が良く独唱したが、今は声が出なく歌いたくても駄目だ」と言って、声を出そうとはしませんでした。私が「出る声

でやれば」と言ってもやつてくれず残念でした。

貴女の実家は小出の下駄屋さんでした。そして貴女は新潟県の職員として、ぼこさま(蚕)の検査員をして長岡・五泉・新潟と方々で活躍し、真面目に働かれましたね。

私たちの娘時代は戦時中で、貴女はお互い心に決めた結婚相手が居られましたが、海軍で出征し帰らぬ人になりました。清き思い出を胸に仕事一筋に定年退職を迎え、新潟に家を建て、甥御さんを養子にされ幸福な日々を過ごされましたね。それでも肉親の縁が薄かったのか、その息子さんに先立たれはしましたが、小出に在住していた息子さんのお兄さんの鉄夫さんからのお話で、鈴懸に入居されたんですよ。鈴懸に入ったことによって自分の心を癒すとともに、故人の追善回向に毎日三〇分間般若心経を唱えられる姿に、いつも頭が下がっております。「お茶飲みに来て」と、伺う度に姪御さんからの贈り物をはじめ、ほんとは楽しませていただきま

した。またお部屋の中もいつもきちんと整理され、清潔になさっていましたね。

私が貴女を偉いと思ったのは、話に花が咲いても他人の悪口は言ったことがないことです。本当に心のきれいな赤澤さん…と感心していました。

ある時、仲良しこよしの私たちを、鉄夫さん夫婦が広神のコスモス畑へ連れて行ってくださ



H16. 9. 11 コスモス畑にて

り、とても嬉しかったです。あの時の貴女は私より足が丈夫で元気でした。昨日の事のように思い出されます。その時の写真が何枚もあり、誰もいなく淋しい時など部屋の中で眺めて懐かしんでおります。

貴女が車椅子になられてから行き来はなくなりましたが、いつも食堂で見守っていました。

黒岩先生も度々往診に訪れるなどして、貴女のことを気遣っておられたと伺っておりました。貴女が亡くなる前日も見舞ってくれていたそうです。その翌日の一二月三〇日の夜七時に大往生されましたね。知らせを聞き貴女の旅立ちを知った時大泣きをし、一晩中貴女と過ごした日々を思い出していました。朝、自分の頬に涙が流れていたのを知り、泣きながら眠っていたのだなあと思えました。

その時の私の心境を詠んだものです。

『亡き人を 終の別れと弔えど

心は消えず ありし面影』

そして私はいつもベランダの窓を開け、空を見上げながら偲んでいます。

『あゝあの空に

懐かしい友がいる
また逢える日を

今よりぞ待つ』

心からご冥福をお祈りいたします。私も後から参りますので、また仲良くしましょうね。

何年後か分かりませんが待っていてくださいね。



合掌。

入居者コラム

「真柏」に魅せられて



ケアハウス鈴懸入居者

藤間 純右衛門(匿名)

もう還暦かと思った時は、体力的にも気力もまだまだと思っていた。それから凸凹人生を送るうちに時が過ぎ、今は人生晩年、心のオアシス鈴懸に入居してわがままをしながら早数年。特殊な人種に見られているかな。とにかく後期高齢者になってしまった。趣味以外のことは徹底的に身が入らない。今この時も同じだ。韓ドラの時代物が見たい、テレビが気になる、今この時間は戻らない。外は細雪が降っている。細雪となれば五木ひろしだ。

去る四カ月前の十一月、人生後期になったらどんな趣味がよいかとふと考えた時、人様が素晴らしい歌を歌っていた。今まで心に余裕がなかったのか、歌に興味がなく宴会があっても歌えない。鼻歌も出なかった。せっ

つかく鈴懸に心の癒しのカラオケ会があるのだから参加しようと思いついた。人様はよくあんな声が出るものだと感心する。こんなにも難しいものとは。しかし反面おもしろい。すっかりはまってしまった。皆さんも出席するのが楽しそうだ。

外は一転ボタン雪になって来た。冬の空は低くて押しつぶされそうな圧迫感があり嫌いだ。この辺はいい感じだ。熊のよう

ら、暑さ寒さや水の多い少ないなどは耐え抜く力を持っている。考えられないほどの長い年月、寒風強熱の荒れ狂う岩場でじつと耐えてきたのだからその労をねぎらい、肥料や水などをやり毎日見回って可愛がってやるべきだ。



推定三千年も命の愛
「真柏」。心込めた
採集と蘇る。
情で今に蘇る。

ただだけありがたいと思う。天災とは恐ろしく悲しい出来事だ。数十年前まで採集人たちは人の立ち入れない岩場の真柏採集権を買い、五人一組で直立の岩場に一〇〇mもロープで下がり、岩を欠いて真柏を抜きとった。背中にも布団を掛けその上から真柏を背負う。岩に真柏が引つかかたりこすったりしないように、手と足を突っ張って岩から



今もビジネスウーマンの面影が...

グループホーム桐の花に私が行く。「いいお洋服ですね。とつても似合います」とかコメントをくれるのが、大塚悦子さん（九七歳）。私はいつも、大塚さんの言葉に励まされて、おしゃれに気を配るようになった。その大塚さんがこのところ元気がなくて、朝は、いつもベッドで「夢の中」。午後になってようやく目が覚める生活が始まって一月ぐらいたった時、夕方、お部屋を訪ねた。

「まあ！ 奥さま！ よく来てくださいました」とあいさつされた。「奥さまは大塚さん独特の響き、「やめてください」と言えない、言っただけいけないときさえ思わせる雰囲気がある。インタビュを始める。よく考えてゆつくりと語ってくださいさる。

—生まれは？—

「小千谷で、大正三年一月二十九日です」。この年の方で、ご自分の生まれをこのように言われる方は珍しい。「父は山本善三。母はイチ、父は、いわゆるアキンドでした。海産物を買っていました。私は、小千谷小学校の後、高等科を出て、家の手伝いをしていました。本を読むのが好きでした。兄たちがたくさん本を蓄えていましたから、それを読みました。そして裁縫を習いに行っていました。和服を縫ってお金にするところまでは行きませんでした」

恋愛結婚



「三〇歳の時に結婚しましたが、相手は、海軍だったので、三年帰ってこなかったのです。それを待っていたのです。幼馴染で、年は一つ上です」

—恋愛結婚ですか？—

「恋愛結婚と言えはいいのでしょうかねえ。結婚するんじゃないかと思われようない付き合いました」。ゆつくりと、でも正確に言葉を



選んで話されます。「舞鶴の官舎に住みました。行商したいと思っていたけど、明日のことがわからない時代でしたから、しませんでした。子どもは四人産みましたが、一人は、小さいうちに亡くなりました。こんな悲しいことはありません」

—大正三年生まれで三〇歳の時、と言え、一九四四年になりま。戦争の末期に結婚したことになるますね—

「舞鶴には、一年もいませんでした」

ここで「すこし時間をください。頭を整理しますから」と言われた時には、「お疲れでしょうから、また次にしますね」と、おいとましました。

またしばらくして続きます。

—初めての赤ちゃんはどこで生んだの？—

「舞鶴の海軍病院で生むという話もあったのですが、身内がいるところのほうがいいというところで、新潟で生

みました。その頃、兄が新潟にいたので、父も母も新潟にいて、そこが実家のようなだったので、大きなおなかを抱えて戦争中に新潟に戻ってきました」

—その赤ちゃんを連れて舞鶴に戻ったの？—

「そんな悠長な時代じゃなかったんです。生まれて、名前を春子とつけてすぐに亡くなってしまいました」と涙が目に光っていました。夫君が、手紙で名前を言ってきたのだそうです。

「爆弾がいつ落ちてくるかわからなくて怖い思いをしました。舞鶴の官舎の隣に住んでいた人が、新潟県の人だったので、その奥さんと、新潟へ帰ろうという話をしていました。そのうち、終戦を迎えました。みんなが集まってバンザイバンザイと叫びました。主人は、戦争が終わって、海軍には勤められなくなっただけ、幸い、人事部にいましたから、新潟県庁の付属で、残務整理をすることになりました。残務整理というのは、海外から帰ってくる人たちを受け入れたりします。あのころは、いろいろなことをしましたよ。子

どもを負ぶってその下に米一升を隠して『関門』を通るのです。米は、田舎に行つて分けてもらつて、それをほしい人を持つていく。そうすると着やすい着物をくれる。今度はそれを売ります」

―着物を仕入れるの?―

「仕入れるところはしないですよ。市場はあるけど、私なんかは、素人ですから、コメの代償に着物をもらうんです。稼いだ人は稼いだそうですよ。こっちも素人だけど、お客様に感謝されましたよ。私にも、お得意さんができましたから、続けていました。自分のお金で、自分の時間で、よくよくやったものと思ひます」

こない人どこにもいない

「主人が定年になつて医師会の仕事をしていました。でも、七〇歳ぐらいで腎不全で亡くなりました。家に帰つて書いたものを見れば、いつ亡くなつたのかわかるんですけどネ。いい主人でしたよ。喧嘩なんかしたことがないし、優しいだけでなく

て、きついこともありません。頼りになる人でね、こない人、どこにもいないと思うほどいい人でした」

―亡くなった時は、悲しかったよな―

「もう起きられな

かつたから、仕方がないと思つて、しつかりしなくてはと思ひました。人生に悔いはないです」

「コメを隠して『関門』を」といふあたり、若い皆さんにはわからないかと思ひます。戦後は、法律で、いくつかの品目は、売買が禁止されていきました。私の父は、岡山で、ダム工事をしていたのですが、ガソリンをほしいという人に譲つてあげたといふことで、逮捕されたのでした。米を買つてはいけないう法律に従つて、餓死をした裁判官の話がありますね。そんな時代でした。

小千谷に住んでいた時に、斉藤美容院で頭の手入れをしてもらつていたそうで、その斉藤さんが、鈴懸に住んでおられるカネさんでした。鈴懸のお茶会で、

大塚悦子さん 「ビジネス ウーマンの 走り」

何十年ぶりの再会を果たしたのでした。

私は一つ大変驚いたことがありました。

それは、終戦

を喜んだという話です。玉音放送を聞いた後の情景は、たいいてい沈痛な表情だったように記憶しています。でも何回聞いても「バンザイ」をして喜んだというのでした。それで考えたのは、「海軍」だからかと思つたのです。日米開戦に海軍が反対していたのは、皆さん、ご存知だと思います。戦争中もずっと反対して、終戦を喜んだ、というのであつたら、すごいなあと思つてしまいました。

大塚さんは、体力が弱くなつてきていて、午後になつて目覚める状態になつてからは、朝食は抜きになつている状態なのに、これだけの長い話をしてくださいましたことに深く感謝しています。

それから数日して、大塚さんの娘さんが、埼玉から来られた

ので、母娘の大切な時間に割り込んで、娘さんからお話を伺いました。悦子さんに聞いてもどうしてもわからなかつたのは、「なぜ浦佐に引越してきたのか?」でした。今年六〇歳になる末娘の松本美紀子さんからの話でわかりました。

「父が七九歳で亡くなり、その頃から、母の仕事が少なくなつてきました。和服用の反物を売つていたので、小千谷の家を手放さなくてはならなくなつて、私たちがいる東京に近いところがいいからと、一人で誰も知り合ひのない浦佐を探して、一軒家を借りたのでした。その時、もう八〇歳を過ぎていました。浦佐の人でも大塚さんから反物を買つたという人がいます。その人の話では、「大塚さんの品物はいいものばかり」とのことです。それから、元気な時には、東京までも売りに行つていたそうです。八〇過ぎてから、営業のために上京する、とは!素晴らしい活躍でしたね。

確かに「ビジネスウーマンの走り」でした。

アメニティーフォーラム16

研修報告記

桐鈴会理事 森山里子

このフォーラムのことを黒岩理事長から聞いたのは昨年の一
月、障害福祉サービスの立ち
上げの仕事を手伝わないかと声
をかけられ、重い腰をようやく
上げようとして、まず県庁に話
を聞きに行くことになった車
中でした。

何しろ私が障害福祉の仕事をして
いたのはもう一五年も前の
ことで、その上親の介護のため
にケアハウスの仕事をやめてか
らも四年半も経っているのです。
その間に障害福祉関係の制度は
すっかり変わり、現在の自立支
援法もほとんどわからないのに、
その法律もまた近いうちには総
合福祉法に変わろうとしている
動きの速い福祉の世界です。最
近の障害福祉はどんなことにな
っているのか、浦島太郎のよう
になっている私自身のリハビリ
のつもりで、このフォーラムに
参加することにしたのです。
はじめこのフォーラムのパン

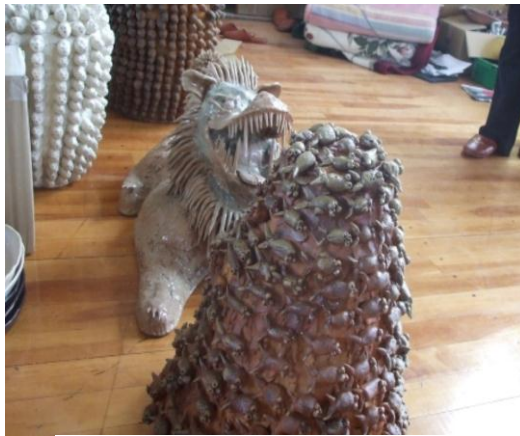
フレットを見たときには何かの
間違いではないかと思いました。
何しろ二泊三日の会で、一日目
は二四時まで、二日目は朝の八
時一五分から夜の二四時三〇分
までびっしりと講演やら対談や
らシンポジウムが組まれてい
るのですから。何よりも驚いた
のは二日目一万円も払って参加
する交流会が夜にあり、そのあ
とまた分科会が三時間もあるの
です。

それと並行してバリアフリー
映画が上映され、別の会場では
アール・ブリュット展（生の芸
術）という障がい者アートの展
覧会もありました。また最終日
には湖南市福祉ツーリズムモニ
ターツアーという募集もあり、
欲張りな私たちはその申込みま
でしていったのです。

フォーラムは障害福祉の現場
の人はもちろんのこと厚労省や
滋賀県庁、大阪市、などから大
勢の役人が参加し、新聞社や医
師会や家族、弁護士、国会議員、
地方議員、大学教授など本当に
様々な人たちの協力で、全部で
三〇以上のメニューが組まれて
いて、全体としてその大物たち

がぎつくばらんに語り合うとい
う雰囲気でした。

私と理事長はそのすべての日
程をときどきうつらうつらとし
ながらも完全参加しました。フ
ォーラムの最後は国会議員八人
が一堂に会しての公開討論で締
めくくられました。合間を縫つ



近江学園で陶芸作品を見る

て盲聾者の夫と脊髄障害を持つ
妻という若い夫婦の大変感動的
なドキュメンタリー映画も観る
ことができました。アール・ブ
リュット展も大変素晴らしいも
のでした。

そしてモニターツアーではか
の有名な糸賀一雄氏や田村一二
氏の創設した近江学園や一麦寮

を見学し、くらしカフェあじわ
いという喫茶店も見学しました。
信楽の町に近く、陶芸が盛んな
地域でどの施設でもなんともい
えない味のある陶芸作品があふ
れていました。今度作る工房「と
んとん」でもときどきは陶芸を
やりたいなと思ったりもし、表
情豊かな小さなフクロウの作品
二つを買ってきました。

出発の日の朝は大雪で、朝五
時前に起きて雪を片づけ一番の
新幹線に乗り、帰りは最終の新
幹線に遅れてはならぬと京都駅
で「ひかり」にうまく飛び乗
りました。この三日間はいろいろ
な意味で刺激の多い実りある時
間でした。理事長より一〇歳も
若く、しかも体力にはかなり自
信のある私ですが、踏んだ場数
と足の長さの違いで三日間いつ
も秩子さんの後を追いかけてば
かりいて、さすがかなわないな
と感服した次第です。

工房「とんとん」とケアホー
ム「おひさま（仮称）」の両方の
事業が採択になる可能性が出て
きたとの情報を聞きました。今
後私のリハビリ効果がなんとか
表れることを願っています。

黒岩揺光とスージン による 『ソマリア報告』

2012. 1. 6 (金)
於 夢草堂

桐鈴会理事長
黒岩 秩子

夫婦がナイロビから帰国して
急きよ開いた報告会



六日は、小雪が降る中を一時
間前から新幹線で来られる方が
集まり始めて、時間になった頃
には座るところがなくなつて立
見席となった。近所の子ども園
から学童の子どもたちが一〇人
ぐらいと、職員も数人来たので、
一番前の座布団席に座ってもら
った。

初めに私が少し、揺光を教え
ないで育ててきたことや、揺光
とスージンの出会いなどについ
て紹介してから二人の話が始ま
った。

揺光が初めに、なぜ自分が難
民支援にたどり着いたのかを話
す。中学時代は新聞配達をして

ためたお金で競馬をしていた。
高校時代アメリカに行っていて、
そこでもカジノに行っていた。
その後大学でヨーロッパの難民
と出会って、やっと自分を見出
すことができた。ビルマからタ
イへの難民のことを修論に書い
てユトレヒト大学を卒業。毎日
新聞記者三年の後、平和構築人
材育成という外務省の一年間プ
ログラムでケニアのダダーブに
行く。ここは、ケニアの首都ナ
イロビから五〇〇キロ、ソマリ
ア国境からは一〇〇キロ。そこ
を難民たちは歩いてキャンプに
たどり着くのだが、去年の飢饉
で逃れてきた人たちは途中かな
り亡くなった。

スージンは「難民」の定義や
統計についてパワーポイントで
紹介した。とても分かりやすい
話し方で好感度抜群だった。

ソマリアは二一年間無政府状
態。欧米が後押ししている暫定
政府と、アルカイダなどとな
がっているといわれているイス
ラム武装集団とが戦っている。

揺光が言うには、そういう戦
いの中から逃げてきた人の中に
は武器を持ったまま来る人もい

て、難民キャンプの中でその武
器が使われることがあるという。
「キャンプには囲いがないので
チェックのしようがない」との
こと。広い土地がキャンプとし
て用意されているが、ここに逃
げて来た人たちは、そこに自分
の家を建てなくてはならない。

このキャンプの中は貧富の差
が激しい。金持ちは大きなレス
トランを建てたりする。四六万
人もいるキャンプはさながら大
都会。車、携帯、テレビなどを
持っている人もいれば、日々の
食糧に不足している人もいる。
初めに来た人は、すでに二一年
もここに住んでいるので、この
中で学校に行く。ここでの就学
率はキャンプの周りのケニア人
たちのそれよりも高いし、ソマ
リアにいる人たちよりも高い。
去年の一〇月にスペイン人が
二人拉致されて未だに見つかっ
ていない。この事件からダダー
ブの国連のオフィスが危険にさ
らされて、皆ナイロビに引き上
げた。国連職員をはじめとする
NGOなど支援者たちは、高い
塀で囲まれている国連の建物の
中で生活していたのだが、そこ

までが危険にさらされてしまつ
て、支援ができなくなっている
団体がほとんどだという。

NGOライフライン基金



揺光が去年の五月から工場
長をしているNGO国際ライフ
ライン基金では、揺光以外は全
員難民たち。工場が二つあつて
四〇人がそこで働いている。こ
こでは七輪を作りそれを無料で
難民たちに配っている。アメリ
カ人の富豪が資金を出して運営
する。

ライフラインとは命綱のこと。
日本では、電気・水道・ガスと
思われているが、ここでは次の
ように使われている。命綱は差
し出す方と、差し出される方が、
お互い引っ張り合わなくては稼
働しない。つまり難民支援は共
同作業だということだ。

七輪をなぜ使うのか。従業員
への説明会を持ち、七輪の有用
性を理解してもらった。そうし
て時間どおりに働くようになつ
てきたら、まったく人数が同じ
だというのに七輪の製造量が二
倍になっていた。揺光は言う。

「難民たちの潜在能力を使って、国に帰っても七輪工場を建てられるようになったらいいと思う」

ダダーブのキャンプは九割がソマリア人。四六万人のうち、NGOに雇われている人は五〇〇〇人くらいいるが、それはほとんどが読み書きできる人。ライフラインは読み書きができなくても製造に参加できるので、障がい者にも開放しようという組んだ。少しの期間インターンとして働いてもらって、成績がいい人を雇用了。その人は言う。「一〇年間何も仕事ができなかった。初めて働くことができてとっても嬉しい」

始まってから二時間経っても、質問が続いて立ち上がる人がいない。立見席も含めて一〇〇人以上の人たちが聞いてくださった。「面白かった」「時間が経つのが早かった」などの感想を述べながら帰られた方があった。懇親会に残った人の中には、医学部の一年生で「この四月から休学してアフリカを旅しようと思う」という人がいた。青年海外協力隊で活動しているお父さ

んと一緒に新潟市から来られた。鈴懸人居者の「学者」と言われる九〇歳の吉田さんも質問してくれた。

学童の四年生女子が家に帰って「揺光さんの話がとっても面白かったから、揺光さんが書いた本を買って」と言ったという。「『国境に宿る魂』（世織書房）」を届けたらとても喜んでくれた。



大勢の人が集まってくださった報告会

感想が寄せられた中から、萌気園職員四人のものを合成して紹介する。

私を含め、あの場にいた半数

くらいの方は難民という本当の意味、現状を知らなかっただろ



うと思います。

難民という言葉や、実際にそこで生活している人々への募金に対して今までは気持ちが変わったことは確かだ、恵まれてる国や人間だからこそ、ソマリアだけではなく貧しい国々へもつと興味や関心を示すべきだと思います。

黒岩揺光さんのお話の中で、「七輪の意味も分からず、ただ作業として作って配布していた。そこにも注目し教育を行なってきた」とありましたが、介護の現場で初めて働く人に介護の「意味」等をどう伝え、「仕事」を伝えていくかを考えさせられるいい機会になりました。

NGOとしてもそうですが、自分が援助者として救済者に何をしてあげられ、どうこの先に繋げて行けるかというのがはっきりと分かりました。

過去から現在の活動に至った状況と現在の現地での難民の自立支援の視点に立った活動内容が非常によく伝わりました。

「その後の難民キャンプ」について報告会を楽しみにしています。

編集後記

足かけ五年の凛々編集稼業からこの度、目出度く卒業させていただきますことになりました。いろいろお世話になり、ありがとうございました。携わった号数うございました。三〇弱、二ヶ月毎という相撲場所のようなスケジュールの繰り返しで私の仕事量も変化しました。

一番の難関は「陰の編集長」。執筆者の原稿文字数に制限をかけるな、というとても優しい編集方針。再三にわたる細やかな原稿変更、要求、確認。せっかくなの二連休を作業にいそしみ、終わった後の居酒屋まで電話が来るモーレツさ。編集・レイアウト・校正が終わっても約八〇〇部の印刷、折り、配布、郵送の手配と続きます。

現在では編集の全てをパソコンでやっていますが、今後、林施設長と森山芳美さんに委ねることになります。ご迷惑をかけるますが、どうぞよろしく。

(島村 義彦)